り、人の德もまた數なり、德にはかに輝やく人はかならずろの末短し、德を惜みて廣大ならざる人はかならず其德永く傳ふ、廣大ならんと欲するときは則ち後昆かならず微少なり、先師つねにいへり、德を兒孫に遺す、衣を温かにせず、食を厚ふぜざるなり、今日の我儕猶小德あるもの、これ先師の餘なり、文王三年の命を以て武王に讓るもまたこれ乎、

一人は氣を以て武勇もしたものなり、意旨の强きと云も氣なり、氣の衰へたる時、たはまざるは道ある人なり、多分の人は氣盛んなるゆゑ物をやぶり、浮世をも何も思はざるなり、死近くなる時は平生とみなかわるなり、曉つき萬づ懶くなる心あるは心を付る處なり、曉つきは物靜にして心細くなるものなり、

一今の人を見るに、怜悧にして却て怜悧にあらず、氣志に勝て厭づくものなり、厭くもの趨もるのは氣これなり、氣ゆく所に向つて急にして左右を見ず、ゆゑに一策書を見るといへども、眼一所に在りて一策の書に渉らず、

一策の書中の一條目をあげて、早く趨り人に向ひてこれを說話す、ろの說正義にあらず、しづかに彼の一策の書を見るときは、則ち策中の正義明白なり、一條目に着て早く義を立て、廣く策中を見ずして、唯一條目に就て義を取んと欲す、ゆゑに己が見を出すと云々、これ正義にろむく、今の人一件を見るときは則ち一件に急にし、二件を見るときは則ち二件を急にするなり、志を持つ所なし、志を持つときは則ち氣走らず、心靜かにして前後左右心の渉らざるところなし、今の人何として然る乎、思ふにこれもまた時なり、古へは大智の人多し、故に小智のものは一小事を知り、人に向ひてこれを言ふことを能はず、これを言ふことあたはざるときは則ち笑具と成る、今大智の人出ず、ゆゑに一事を知るときは則ち早く一事を說く、これを聞て、無智の人これを信じて知識とす、ろの人後生といへども智見を高くし、先輩に恐るゝことなし、今季世といへども、猶叢林を歷て、多く人に交はりて、切瑳を受くるものはしからざるなり、

「能師神秀」は共に五祖弘忍大師の會下にあり能は後に第六祖と爲る山は黄梅山なり前に釋せり

「紫野」は紫野に在る大德寺を云へるなり

一惠能師と神秀と同時の祖にして、神秀は山の第一座なり、然りといへども見解能師に勝らず、たとひ見解まさらずといへども、何ぞ隱隔ならん、然りといへどもまた此の如し、ろの談衣鉢に在り、神秀身は菩提樹のごとくの句あり、則ち能師菩提もと樹にあらざるの句あり、神秀の曰く、臥輪伎倆あり、能師また曰く、惠能伎倆なし、今世の初學これを聞てこれを誦すれば箇々点頭す、今世の初學はやく知る、しかも古への神秀此の間に於て什麼となして意を得ず、また今世の初學二師の見解を判斷して口吧々なり、古への神秀什麼としてか今初學に料理せられん、神秀今の初學に及ばざるときは、五祖なんぞ第一座となし去る、今の初學神秀を以て泥の如く看、塊のごとく視て、直ひ一錢ならずとす、今の初學と神秀と高低また如何ん、神秀能祖にまさらずといへども、五祖の法を嗣ぎ一方の宗主とす、初學の人神秀すら尚これを欺く、況んや今世知識と稱する人においてをや、禮もまたなさず、紫野養莫和尚殿裏にて佛に向ひて曰く、巍々たる萬德尊、秋水家

々の月、彼れ此の出家兒、禮もまた缺ぐべからずと云々、若し此の意を以て世上にあて〳〵、禮豈みだれんや、今の初學の人、両祖の問を見る、ろの眼二偈に在るのみ、五祖衆心によりて、神秀ながく一方の宗主と爲さゞるなり、一今の初學の人、錄を殿み傳を見て、即ち一見にろの祖を見盡す、甚だ奇怪なり、下を見るだに猶かたし、況んや上を見るを乎、麽乳予墻は數仞と道ふことを見ず、古への祖墻は吾僧うかゞひがたし、皆人一追祖傳をよむときは、則ち早くろの祖師を知りて、說話することを水晶を隔て〳〵物を見るが如し、ろの說話一々若し的當せば、今の說者いにしへの祖と同器同水なり、實にかくの如きときは、則ち遠く古へを慕んよりは、直ちに今の人を信ぜんには如かざるなり、

一前業により心快濶にして、財を惜むの心なき人あり、外に播すこと多きときは、則ち内に嚢へすくなからず、内乏しき時は、求めずと云ふことなし、もとむることを得ざるときは、則ち貧ならずと云ふとなし、これを貧りて用

度猶いまだ足らず、なをいまだ足ざるときは則かならず耻を顯はす、これを念ふべし、これを念ふべし、これを念はざるときは、則ち曾己が一生不自由を得るのみにあらず、未來の世においてかならず己が如きものを引出して、己が今生の不自由を得るが如くす、彼の別人をして不自由ならしむ、これ己が罪にあらず乎、佛これを思ひ玉ふゆゑに、今日の人を教化じて未來の人をして安んぜしむ、故に曰く、佛法はこれ三世の治とはこれなり、一財我家に入るときは則ちこれを盡す、以て外に播こし、明日の不自由を營せず、此の如き人はよく自己を用ひ得て、有るときは則ちあるに任せ、無きときは則ちろの無きを苦します、食つねに藜莧のあつものあつて、厚味を思はず、衣は一稍百結びもまた苦しとせず、播して外を思ひ、貯へて內に取らず、此の如き人は上の章の心に異なり、かくのごとき人は萬人の中に於て一人あるべからず、若し萬人に一人あるときは則ち十萬人において十人あり百萬人において百人なり、當に今六十余州において豈件んの人百人を得ん乎、

一今の世に生れたるものを何ごとにつきても教て善道にやらんとするに、少しも善に移らず、百日教化しても只本の物にてあるを思へば、佛法は早や世になきよと思はれて淺猥し、教化と云ふことと立ずんば、佛は何ごとにか世に出で說法利生あるべきぞや、佛在世には教へも立ちて惡人も善に移らん、今の世ろれに引かへたるは末法の驗しなり、法すでに無んば世はみな外法なり、外法には自然と立つ、萬事自然にして鷺は晒さざるに白く、烏は染ざるに黑く、みな自然の樣と云へり、人の教化して、惡人變じて善とならざれば、彼の鷺烏のごとし、然るによりて思ふ、法滅して外法となればみな自然に歸するかと疑ふ、然るに又教化と云ふ、佛の教へにかぎらず、孔子の道教化專らなり、惡人を教へて善人となさしめば、自然とは云はれず、己れが修因に依りて惡人も善人となるなれば、人の仕業によりてみな移りやすければ、自然の道とも云はれず、教へと云ふことと立たざれば、聖人

の法消へて跡なし、聖人の法なければ自然なり、如何となれば惡人は惡人のまゝ、偶ある善人も教へなき世ならば、たゞ自然の善人なり、然れば佛法あるときは自然の道消失す、世の孔聖の道も教化立つときは則ち自然とは云はれず、聖道すたるとき世はみな自然の姿なり、然るを心得ざる人佛法は因緣なりと云ひ、二教は自然と云ふ、いな我は三教ともに聖教たるとき自然に歸す、三教ともに教へたつときは則ち自然にあらず、孔子は生知安行天の縱せる採聖なりと云へども、これは外より嘆美して云へる言なり、孔子自から云へるは、十有五にして學に志し、三十にして立つ、四十にして惑はず、五十にして天命を知る、六十にして耳順ふ、七十にして心の欲する所に從へども矩をこゑずとなり、然れば孔子も修因にしてなれる聖人なり、自然の聖人にはあらず、如何にして物ごとを自然とは云へるぞや、鷺の白きも烏と云ふものゝ〻ろの始のはじめを求めしらば、彼が心に白からんゆゑありて白きにや有らん、鴉の黑きも其始めの始めを求めしらば、彼が心に黑からんゆゑありて黑きにや有らん、無始の無明と云ふことを知らず、人はかゝる委しきことは知るまじきなり、鷺鴉も無始無明より成り始まり來れるなり、

一法はろれ嗣べからず、嗣べきは法にあらず、法はろれ斷ずべからず、斷ずべきは法に非ず、逸磨大師の曰く、我法三千年の後、いまだ晉て一絲毫も移易せずと、これ此の意なり、法は其人を得るときは則ち顯はれ、人を得ざるときは則ち隱る、かくるゝときは日の如く、顯はるゝもまた日のごとし、大師の二祖を得るときは則ち嗣に似たり、若し二祖を得ざるときは則ち斷ずるに似て嗣と言ふべからず、又斷ずと言ふべからず、只言ふことい まだ晉て一絲毫も移易せざるなり、

一法は無始より無終なり、斷續無く、只佛出たまふときは則ち法顯る、迦葉佛の後ち、釋迦出たまふとき法顯る、五百年を以て正法とす、佛世を去ること久しきなり、正法今如何んぞ行はれんや、或人問て曰く、六時の行道

「三乘」は聲聞乘、緣覺乘菩薩乘これなり
「十二分教」

これ佛法の行におちずや、曰くこれ事法なり、理致にあらず、又問ふ、事理碍なきときは、則ち事法すなはち理致にあらす乎、曰く、これ上等なり、中下の言に非す、また問ふ、念佛念法これ佛法の行ひにあらす乎、曰く、これ結緣の一得のみ、眞の行ひと謂はす、又問ふ、論義法問これ佛法にあらす乎、曰く、これ言說のみ又問ふ、參禪學道これ佛法にあらす乎、曰く、參禪學道は古人の一問一答りの語の通ぜざる所、これを知んと欲す、またこれ眞の禪にあらす、又問ふ、祖師の語錄を以てこれを讀むこと縱橫自在にこれを沙汰す、これ達禪の人に非す乎、曰く、これ辨舌利口の人なり、善星比丘よく三乘十二分教を讀むといへども地獄に入ることを免がれす、心法を知らざるためなり、これに依りて言ふ、佛世をさること久しきなり、正法如何んぞ行はれん乎、假令ば法は一口の洪鐘のごとし、人を得て扣き擊つときは則ち鳴る、人を得すしては聲なし、巡りて扣くときは則ち聲なき所なし、法もまた然り、人を得るときは則ち法顯る、人を得ざるときは、則ち法なきに

似たり、塵々刹々頭々物々として法に具はらずと云ふことなし、觸背ともにみな法なり、鐘を巡り扣くときは則ち所としてみな鳴らざるなきが如きなり、

一正像末のことは人にありて時にはあらざる與、佛在世といへども放逸無慚の者もあり、飲酒または非時乞食の者あり、時に佛これを制し、これを止めしむるを戒といひ律といふ、況やまた法華會上いたりて五千の退席あり、衆中の糟糠なり、退きぬるもまたよしとの佛言あり、これ像末の人なり、佛滅後五々百年の間は言ふにおよばす、今時といへども能信の人は或從經卷或從知識して、純一無雜に勇猛精進して辨道工夫し、無上の妙道を修證するあり、是正法の人に非すや、今時は敎のみありて行證なしと退心し、自ら糟粕となる勿れ、至禱々々、

一佛祖通載に曰く、周孔のいまだこれを言はざる、物蕉々として窮りなし、詩書これを載せざる事茫々として何ぞ限らん、信なるかな書は言を盡さず

、言ば意をつくさず、何ぞ六經の局敎に拘はりて、三乘の通旨にろむくことを得ん哉と云々、

一百尺竿頭歩を進むと、此のこと人の分明に說くなし、山谷が詩に曰く、百尺の竿頭歩行を放まゝにす、更に脚跟に向つて一節を參ぜよ、百尺竿頭歩を進むと言ふ心は、百尺の竿頭は上に向ふ至極の處なり、百尺竿頭に到らんと欲せば、第一節を參ぜよ、もし一句に參ぜば百尺竿頭もまた自由を得べきなり、百尺竿頭は青霄に獨歩するなり、青霄に獨歩せんと欲せば、一句を參ずべきなり、脚跟下の一節と云ふは百尺の竿頭にも第一節のあるものゝ、第一節を心得たらば節々百尺にいたりてもまた異なる節あることなきなり、又招賢大師の偈に曰く、百尺竿頭不動の人然も得入すといへども いまだ眞となさず百尺竿頭須らく歩を進むべし、十方世界現全身と云々、

一學をする人はかならず惡惠を生ず、ろのゆゑ如何となれば、人を超ゑんと欲して才ある人を壓す、しかも又不才のものを笑ふ、我に順ふて一字といへどもこれを問ふときは則ち欣び、我に違ふて千人に問へばこれをろねむこと敵の如くす、眼を高くして人を直下に見る、此等はろの惡惠の一二なり、無學の人は諍ふ所なし、これ學力無きゆゑ、我本然の心を存するなり、學をする人は曲節多く、學なき人は直心なり、學をする人は人を疑ひ、學なき人は人を信ず、信はろれ萬行の始終なり、只學をなして惡惠を求んよりは、寧ろ無學にして自己を存せよ、彼の學をする人は自己をうしなひ、惡惠を生ずるなり、

一往昔は學びて道を明らめ、身を直くし心を清くす、今は學びて惡智を長ず、これ時なり、聖人もまた時に勝つことあたはず、ゆゑに孔子も時に遇はざるなり、

一順て禮するとは、頂肩手腰膂足みな禮あり、佛入滅のとき迦葉(かしやくつはん)闍崛山(じやくつくせん)に在り、正定に入るとき大地震動す、これ佛入滅なることを知りて疾く行く、七日のみつるのときに至る、ろのとき悲哀して、頂肩手腰膂(ちようけんしゆようりよ)禮をなす、如

來の足見えず、ろのとき願心を發し禮せんことを請ふ、時に佛千輻輪の相を現して、棺より双趺を出してこれを示す、此事を參する人道理を知らず、只ほとけの双足を以て這个のものとする而已、千輻輪の相一足みな理あるなり、

一頭面足攝禮とは、禮拜のとき佛の頭面を見たてまつり、見おろして佛足を手に承るごとく、頭面より足に至りて攝して禮するぞ、

一扈從（韻會に曰く從は尾なり、のちに從を從と曰ふなり）と云々人の從者を曰ふて、扈從と曰ふ また跋從は猶强梁のごとしと云々、跋と云ふは如何にもつよくすくやかに、人をも何とも思はず、凶横自恣にして人を凌ぐの貌と云々、

一幽步跡なく、妙動たづねがたし（正崇記下）

一我に弟子空侍者と云ふものあり、父母なく兄弟なし、氏族を究め知らず、生緣も言ひがたし、初め來ると云ふことともなければ、歸り去んと思ふこともなし、我渠を罵詈すれども慍れる色もなし、疾病の患なければ、醫藥の術を賴まず、幸ひに我弟子には一分の相應なりと思へり、渠れ時々我に問ふ、我答ふ、また我心に浮ぶこと渠がために說き、渠と酬對す、管筆のと城子これを留む、

玲瓏隨筆卷之四 大尾

明治廿九年八月三十日出版
明治廿九年九月三日發行

金貳拾錢

編輯者　京都市上京區南禪寺町第三十三番戸　進藤端堂
發行者　京都市木屋町二條東生洲町十一番戸　河村泰太郎
印刷者　京都市御幸町二條上達磨町平安印刷商會　村田三男三

發行元　京都市木屋町二條　貝葉書院

版權所有

大賣捌所

京都　河合文港堂
同　小川多左衛門
同　出雲寺文次郎
同　興敎書院
同　顯道書院
同　藤井佐兵衛
同　永田長左衛門

京都　澤田友五郎
同　西村十次郎
同　藤森改進堂
同　大久保文林堂
同　大谷仁兵衛
同　大坂金尾種次郎
同　松本善助

東京　森江佐七
同　鴻盟社
同　出雲寺萬次郎
同　國母社
同　明敎社
同　哲學書院
同　經世書院

名古屋　三浦兼助
神戸　石丸日東館
熊本　長崎次郎
長野　西澤喜太郎
米澤　素月晨平
越後　樋口小左衛門
同　目黑十郎

前眞言宗長者高志大了師題字　權田雷斧僧正序文　原田了澄師著

數珠功德經和解、

洋裝正價金五錢
全一冊郵送費貳錢

數珠の粒には佛不可思儀の神力を以て加持し給ふ處のものにして恒沙の功德を具足せり而して我佛敎信者たるものは平生念持する所の數珠の功德を知らさるへからす此の故に本書は數珠功德經に最も平易なる和解を施し以て何人にも數珠の功德を知るを得せしむる樣なしたるものなり天下佛敎の信者平生數珠を念持するの人は請ふ必す一本を購讀し玉へ

●白隱禪師 施行歌

洋裝 全一冊 正價金貳厘五毛 郵送費 廿冊迄 貳錢

●白隱禪師 敎訓雀囀說

洋裝 全一冊 正價金貳厘五毛 郵送費 廿冊迄 貳錢

●安心はありたゝ記

洋裝 全一冊 正價金貳厘五毛 郵送費 廿冊迄 貳錢

前三書共新年の歲玉、派出先への土產、法事の引物、彼岸の配り物等に適當なり大方の諸君精々澤山施本せられ現當二世の利益を授け玉はるゝ樣弊院は此非常大減價に賣出す事とせり猶讀々新著有益にして斬新の意匠を加へたる美麗安價の施本書を發行す乞ふ多少に不限御購求あらんことを

佛敎各宗綱要

全五冊　日本紙摺和裝顏彩美本
正價金壹圓參拾錢　郵送費金拾八錢

佛敎各宗綱要の最も正確にして且つ諸宗を悉く網羅したるものなかりしは日本佛敎の大缺典たりしなり是を以て各宗協會は夙に之を編纂して此缺典を補ふの必要を認められ明治廿三年の定期大會に於て之を議決し爾來編纂委員は專ら此事業に從はれたりしが今や編纂全く成りて弊院之を發行するの大榮を得たり是れ蓋し近時佛書出版の魁たるものにして其叙述の正確なる其文爲の美麗なる弊院の敢すると須ひすして大方の諸士が夙に翹かく信せらるゝ所なるへし

法相宗管長西谷勝邁師。華嚴宗管長戸田英懷師。天台宗管長戸田定順師。天台座主戸田定順師。天台宗管長史山科祐玉師。天台宗眞盛派管長三輪澄諦師。眞言宗新義派管長谷寺化主上野相應師。眞言宗新義派和泉院化主佐伯陸基師。眞言宗新義派長者鼎龍曉師。眞言宗新義派管長日野靈瑞師。淨土宗西山派前管長菅原精京師。臨濟宗念佛宗管長栗栖忍師。淨土宗前管長日野靈瑞師。淨土宗西山派前管長菅原精京師。臨濟宗建仁寺派管長住田默雷師。臨濟宗東福寺派管長霄貫道師。臨濟宗東福寺派管長滋門敬沖師。臨濟宗南禪寺派前管長松山舜恩師。臨濟宗圓覺寺派管長釋宗演師。臨濟宗天龍寺派管長高木龍淵師。臨濟宗大德寺派前管長菅廣州師。臨濟宗妙心寺派前管長國寺派管長中原東嶽師。臨濟宗永源寺派管長久松琢宗師。臨濟宗相國寺派管長光萬丈師。眞宗本願寺派門主大谷光尊師。眞宗高田派門主常盤井堯熙師。眞宗佛光寺派門主藤谷敬雄師。眞宗興正寺派門主華園澤瀉師。眞宗出雲寺派管長藤善應師。眞宗誠照寺派管長二條秀源師。眞宗三門徒派管長平光圓師。日蓮宗管長小林日薰師。日蓮宗妙滿寺管長板垣日映師。日蓮宗本成寺派眞主神保日惟師。日蓮宗管長河野覺阿師。各御題字。芦津僧正序文。高地默雷師跋文

佛敎各宗協會編纂

發行所　京市都上京區木屋町通二條　貝葉書院

PRESTO